

広島土砂災害(続)

写真は8月24日「朝日新聞」朝刊1面掲載にされたものだ。広島市安佐北区と安佐南区で20日未明に起きた土石流は、少なくとも50カ所にのぼり、長さ約11キロ、幅3キロ弱の帯状の範囲に集中していた。被害は、二つの山に挟まれた谷間に集中している。周辺は「まさ土」と呼ばれる花崗岩のもろくて崩れやすい地質で、そこに短時間に豪雨が降ったことが引き金になったようだ。

土砂災害の発生直前、南西から北東に向かって直線上に次々と積乱雲が並んで大雨をもたらす「バックビルディング現象」が起きていた可能性が高いとされる。初めて聞く「バックビルディング現象」であるが、これに似た局地的豪雨などの気象現象がなぜ頻発するのか、そのメカニズムをもっと知りたい。

1999年6月の豪雨で、広島市北部や呉市などで31名が死亡、1人が行方不明になった土砂災害でも、今回と同じような崩れやすい場所で起きた。この災害をきっかけに、土砂災害防止法が制定されたが、再び広島で大規模な土砂災害により多くの犠牲者が出た。花崗岩や火山に由来する「シラス」などのもろい地質は広く分布しており、土砂災害リスクが高いところは全国至るところにある。

23日「日本経済新聞」によれば、今回の土砂災害現場のほとんどは危険個所と認識されながら、土砂災害防止法にもとづく「警戒区域」などに指定されていなかった。その背景には、土地の資産価値低下に対する住民の懸念などもあるという。土砂災害発生から最初の週末を迎えた23日、被災地には多くのボランティアが駆けつけた。安佐南区八木3丁目の現場では、ボランティアたちが、家の中にたまった泥を運び出したり、流れてきた大きな石を取り除いたりした。

それにしても、都市計画・まちづくりのあり方に疑問を感じる。23日「朝日新聞」声欄に、「もともと弱い地質とわかっていた場所なのに、なぜ宅地開発が進んでいったのだろうか」という投書が掲載されていた。まったく同感だ。とりわけ災害現場には、多くの県営住宅が建てられていた。あらためて自治体政策のあり方が問われる。



(2014年8月25日)